

はしがき

日本人は、身の回りの環境のなかに実に多様な神や妖怪を生み出し、語り継いできた。この事実を、「防災」という実践的な課題のもとに捉え直し、地域、学校、自治体などでの防災訓練や防災教育、あるいは防災計画策定に向けた新たな視点と方法論を提示するのが本書のねらいである。したがって本書は、神や妖怪への言及に多くの紙面を費やしているものの、民俗学や日本文化論ではなく、あくまで「防災論」の本である。

筆者は土木工学の人間である。さらに詳細な専門を問われたら、「地域計画論」、あるいは市民・行政・専門家など多様な人びとが対話しながら公共事業や地域づくりを進めていくための「合意形成学」であると答えている。では土木工学の分野で合意形成を専門にしている筆者が、なぜ神と妖怪について語るのか。その重要な契機となったのは、新潟県佐渡島での経験である。

わたしは「自然再生事業における合意形成マネジメント」をテーマに学位を取得した。大学院生だった時、新潟県佐渡島をフィールドに、トキの野生復帰事業に伴って新潟県が進めていた「天王川自然再生事業」の合意形成マネジメントに従事していた。天王川は、トキ野生復帰事業の重要なエリアを流れる小さな二級河川である。その自然再生計画について地域住民と議論するなかで、下流域における洪水のリスクに強い懸念を示す声があがった。川幅は数メートルの小さな河川であるが、昔からたびたび氾濫を起こす暴れ川だという認識を地域住民はもっていた。天王川下流域の河岸段丘上には牛尾神社が鎮座している。現在の主祭神はスサノオノミコトである。かつては牛頭天王を祀っており、「天王さん」と呼ばれた時代もあった。天王川という名称も、

牛頭天王に由来している。細長く伸びた尾根の先端に位置する牛尾神社は、仮に天王川が氾濫しても浸水しない立地にある。過去に天王川が氾濫した時、牛尾神社の境内に避難した人もいたという。牛尾神社を氏神とする濁上なごみと吾濁あがたの集落では、春に行われる「鬼太鼓」という伝統行事のなかで、この牛尾神社に宮入りし、鬼の舞を奉納する。つまり、治水上の重要なポイントに、伝統的なコミュニティ空間としての神社が鎮座しているのである。

天王川自然再生事業の研究プロジェクトに従事するなかで、わたしは神社と災害リスクの関係について強い関心を抱くこととなった。そのような視点で日本各地の神社の立地をみてみると、河岸段丘や海岸段丘、山麓から伸びた細長い台地状の地形、あるいは氾濫原のなかの微高地の上に神社が鎮座しているケースが多いことに気付く。そのような立地にある神社は、河川氾濫や津波が発生したとしても浸水しない可能性が高い。本書はこの事実を、現在の地域防災の実践のなかに位置付けようとする試みである。

もう一つ、妖怪への着目も佐渡島での経験が基礎となっている。前述した天王川は、加茂湖かもこという汽水湖に流入している。その加茂湖には「一目入道いちもくにゅうどう」と呼ばれる妖怪が棲んでいると伝わっている。一目入道は、約束を守る人間には加茂湖の豊かな水産資源をもたらす一方で、約束を破る人間に対しては仲間を連れて容赦なく集落を襲うという恐ろしい一面をもつ。集落の人びとは、一目入道が襲ってくると伝わる正月に、加茂湖のほとりにある観音堂に立てこもり、床や壁を叩いて音を鳴らす「目一つ行事」という奇祭を数十年前まで行っていた。

加茂湖は、地域が共同で管理し、資源を獲得するためのコモンズ（共有地）である。持続可能なコモンズを實現するうえで、適切なルールと規範が共同体のなかで共有・実践されていなければならない。わたしは一目入道の伝承を知った時、妖怪は人びとが自然の資源とリスクを適切にマネジメントするうえでも重要な役割を担っているのではないかという考えをもつに至った。

以上のような経験を端緒として、神と妖怪を自然環境マネジメントの観点で論じるという構想がわたしのなかに生まれた。本書は、特に自然環境のもたらすリスクの側面、つまり神と妖怪という超自然的存在をふまえた災害リスクマネジメントにおける実践的研究の一つの到達点であり、通過点である。前述したように、わたしは土木工学の人間であることから、最も重要な関心は、今を生きる人びとの安全で豊かな暮らしにいかに関与できるかということである。本書で論じている神話や伝承の考察、あるいは歴史認識については、一面的で不十分な点が多くあることを自覚している。しかし、本書をきっかけに、一人でも多くの人が身近な地域の神や妖怪伝承に目を向け、安全・安心な暮らしの実現に向けた取り組みを始めてくれるのであれば、著者としてこれに勝る喜びはない。